

方丈記 安元の大火

① 予 は 物事 道理 知 た 時 一年
もの の 心を 知れりしより、四十あまりの春秋を

送れる間に、

② 世の不思議を見ること、ややたびたびになりぬ。

③ いんじ安元三年四月二十八日かとよ。

④ 風激しく吹きて、静かならざりし夜、戌の時ばかり、

都の東南より火出で来て、西北に至る。

⑤ 果てには朱雀門・大極殿・大学寮・民部省などまで移りて、
一 夜のうちに塵灰となりにしき。

⑥ 火もとは、樋口富小路とかや。

⑦ 舞人を宿せる仮屋より出で來たりけるとなん。

⑧ 吹き迷ふ風に、とかく 移りゆくほどに、扇を広げたるがごとく

末広になりぬ。

⑨ 遠き家は煙にむせび、近きあたりはひたすら炎を地に吹きつけたり。

⑩ 空には灰を吹きたてたれば、火の光に映じて、あまねく紅なる中に、

⑪ 風に堪へず、吹き切られたる炎、飛ぶがごとくして、

接助

一、二町を越えつつ移りゆく。
ながら

⑫ その中の人、うつし心あらんや。
生きた心地がしただろうか。
や、するはずがないだろう。

（13）あるいは煙にむせびて倒れ臥し、あるいは炎にまぐれて
たちまちに死ぬ。

⑭ あるいは身一つ、からうじて逃るるも、資財を取り出づる人

ににとができ
及ばず。

15 七珍 万宝 さながら灰燼となりに たくさんの宝 が 全部 なつてしまつた。

⑯ その費え、いくそばくぞ。
損害は
どのくらいか

⑰ そのたび、公卿の家十六焼けたり。
火事の時
が
棟た

（18）ましてそのほか、焼けた家は数へて知るに及ばず。

②〇男女死ぬる者數十人、馬・牛のたぐひはどのくらい死んだか
死んだ
たぐひ
際限
邊際を知らず。

人の営み、みんなおろかなる中に、さしもあやふき京中の家を
ばかげた
そのように危険な
の

作る^ハとて、宝を費やし、心を悩ますことは、すぐれて
この上なく
あぢきなく

ぞ | ござります。